
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 天駆ける者 ~ 過去編

オウラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～天駆ける者～ 過去編

【コード】

N94920

【作者名】

オウラン

【あらすじ】

本編『魔法少女リリカルなのはStrikers ～天駆ける者～』のソーマとライの訓練校時代の様子

ソーマ達が訓練校でどのように出会い、今の様にコンビを組むまでになったのか、本編では明かされないソーマ達の過去が明らかに！！

過去編のキャラ設定（前書き）

ここには過去編でのキャラ設定を書いていきます。
本編とは設定が違っているので見ていただければいいと思います。
キャラが増えるたび、更新していきます。

過去編のキャラ設定

初めはやっぱり主人公から設定です。

名前 ソーマ・レイズ

年齢 14歳

階級 訓練生(落ちこぼれ)

魔力量 A+

魔道師ランク 無し

所属 陸士訓練校

身長 137cm

体重 30kg

性格 本編よりも暗い。

頭に血が上りやすい。

他人とどう接すればいいのかわからない。

人物設定

・本編同様、空を駆け抜ける事を心に誓っている。(訓練校に入ったのも少しでも魔法を知ってなにかのヒントになると思ったから)

・明らかに身体中に栄養が足りず、身体は小さくかなりやつれている。
・身体の外に魔力を放出する事が出来ず、訓練校では落ちこぼれ扱いを受け、同期の訓練生を教師からも弄られたり、嫌味を言われたりする。(自分専用のデバイスを使ってるのもその一つの要因)

【デバイス紹介】

なまくら

インテリジェント・デバイス

人格 女性型

形状 待機状態は板にデバイスコアを取りつけている
機動状態では無骨な剣になる。

その他の情報

・過去編ではソーマの事をマスターではなく、ソーマと呼んでいる。

・ソーマの唯一の話し相手である。

次はライの設定

名前 ライ・ロン

年齢 14歳

階級 訓練生

魔力量 B

魔道師ランク 無し

所属 陸士訓練校

身長 167cm

体重 65kg

性格 誰とも関わりを持たずとしない。

気に入らない事には口より手が先に出る。

人物設定

オシリウルフ

- ・ 訓練校では【一匹狼】と呼ばれ、恐れられている。
- ・ 由縁はどんな訓練でも一人でこなし、訓練3日目で気に入らない教官を病院送りにした。

- ・ 半ば訓練校の全員から無視を受けている。
- ・ これについては、ライ自身関わりを持たずとしないので問題ない。

過去編のキャラ設定（後書き）

なにかおかしな所があれば言ってください。

この設定は過去編のみですので、本編とはかなり違います。

第1話『落ちこぼれと一匹狼』（前書き）

本編で所々言ってた訓練校時代のソーマ達の話です。

本編をある程度読んでからこちらを読んでいただけるといいと思います。

これを読まなくても本編に影響は無いと思いますので、ソーマ達の訓練校時代に興味のある方は読んでいただけると嬉しいです。

この話は一度本編の方に掲載した物と内容は同じですので気を付けてください。

第1話『落ちこぼれと一匹狼』

今日も、いつも通り朝の訓練が終わった後、各自のデスクワークをこなしていると、なぜか突然八神部隊長に呼び出しを受けてしまった。

……俺、なにかやったっけ？

……全く、身に覚えがないぞ？

クカカカカ！ 坊ちゃん、なにやらかしたんですかあ？

「……嫌、全く心当たりがないんだが？」

それじゃあ、なんで突然呼び出しなんて？

「さあな？ とりあえず、部隊長室に行くしかないな……ハイネス、残りの仕事頼んだぞ」

クカカカ！ 了解しましたあ！！ では、こっちは適当にやっておきますんで、クカカカカ！！

突然の呼び出しに、俺だけじゃなく、なまくらとハイネスも疑問だった。

……とりあえず、部隊長室に行ってみるか。

幾ら、考えてもわからないので、とりあえず残りの仕事をハイネスに任せて、俺はに言われた様に部隊長室に向かう事にした。

「……あのあ？ 俺、なにかしでかしました？」

「えっ？ なんのことや？」

部隊長室に到着し、俺がなにかしでかしたのか聞いてみるが、八神部隊長は予想外の反応を示した。

……あれ？ なにこの反応？

「え、えっと……なにかしでかしたから呼び出されたんじゃあ？」

「へえ……ああ！ 呼び出しの事か！ あっはは、そんなに心配せんでもええよ。別にソーマ君がなにかしでかしたなんて報告受けてへんから」

「はあ……」

それじゃあ、俺はなんで呼び出されたんだろう？

「実はな、ついさっき部隊長室のメールボックスにソーマ君宛に送られてきたメールがあつてな」

「……俺宛ですか？」

「そうなんよ。宛名を見ても、誰か送られて来たんかわからんから、ソーマ君本人に聞こうかと思つてな」

なまくらにメールを送らずに、わざわざこんなめんどくさいことする知り合いなんて居たっけか……？

「わかりました。それじゃあ、そのメールは？」

「ああ、ゴメン。今、そのメールを見せるから」

そう言つと、八神部隊長は自分の前に映しているモニタを操作する。

すると、俺の目の前にモニタが映し出される。

……え〜つと、一体誰が……っ！！ げえ！！

マ、マスター……この方は……

「……あ、ああ」

……なんで、この人からメールが？

しかも、なんで部隊長室に送つて来てんだよ……

「なんや、知り合いなんか？」

「……え、ええ。まあ」

てか、なんで俺が機動六課に居るつて知ってるんだこの人？
……ますます、謎な人だ。

「や、八神部隊長。このメールは自分の部屋の端末か、なまくらに送つておいてください」

「あ、ああ、ええよ。それで、このメール送ってきた人は「すいません。それじゃあ、仕事に戻ります！」……って！ ちよつと待ち！ ソーマ君、どこ行くんや！」

八神部隊長には悪いけど、今はそんなこと気にしてられない。たく、あの人はいきなり一体なんの様だ？

俺は、急いで部隊長室から出て行った。
なんか、出ていく直前に……

「……ソーマ君があんな焦るなんてめずらしな……フッフ、なんか面白そうやなあ？」

と、部隊長室の中から聞こえてきたのは幻聴だろう。

……結論……幻聴なんかじゃあ無かった。

「……あの……。なんの用ですか？」

「いやな、用って程のことでもないんやけどな……」

昼休みに食堂で昼飯を食べていると、突然前の席に八神部隊長が座ってきた。

……うん、凄くいい笑顔だ。嫌な事しか想像できない。

「さっきのメール誰から送られて来たんやろなって思ってたな」

「はあ、さっきのメールの送り主ですか？」

あの人の事が……なんて言ったらいいんだあの人は？

「そうや。まあ、言いたくないんやったら無理せんでもええけど」

「嫌、別に言いつらいつて事じゃないんですけど……」

実際、俺もあの人がどんな人なのかよく分かんないんだよな。

まあ、簡単に言えば……

「……さっきメールを送ってきたのは、俺とライの訓練校時代の教官です」

「なんや、ソーマ君。そんな人と連絡し合ってたんか？」

「嫌、あの人が連絡してくるなんて、訓練校卒業してから一度もありませんでしたよ。なんで、今更連絡してきたのか見当もつきませんし……」

ええ、全くです。あの人については私も理解できません

「なんや、なまくらも知り合いなんか？」

はい。私はマスターが訓練校に入るよりずっと前から共に居ましたから

てか、あの人についてはもういいだろ。

あの人について考えてたらいつまで経っても答えなんか出ないんだから。

「あの、八神部隊長。あの人についてはそろそろこの辺「あれ？ソーマ君とはやてちゃん。今、お昼？」……って！なのはさん！？」

声が出た方向を向くと、昼飯を手に持っているのはさんが居た。

「おお、なのはちゃん。ホンマ丁度ええ所に、今ちよつとソーマ君の訓練校時代の教官だった人の話を聞いた所なんや」

「ちょ！ 八神部隊長！！ その話はもう止めようとしたんですけど……！」

「……へえ、そうなんだ。ちょっと、気になるかな？」

「そう言いながら、なのはさんは俺の隣の席に座る。」

「……なんか、なのはさんが少し恐いのは気のせいだろうか？
うん。気のせいに違いはない……」

「……で、その教官だった人ってどんな人だったのかな？」

「……駄目だ、気のせいなんかじゃない！ なぜか、今のなのはさんは恐い！」

「え、えっと、どんな人だったのかというと……あれはなんて言うんですかね？ とても、なのはさんの様にこの人が俺の教官です！ って、誇れる人じゃないのは確かですね」

「えっ！？」

「それじゃあ、どういう人やったんや？」

「八神部隊長が続きを促してくる。」

「と言われても、これから先は俺一人で話してもな……」

「うん。これ以上あの人の事を言うんならライが居た方がいいんで、ちょっと、呼んでもいいですか？」

「ああ、別にかまわへんよ。なあ、なのはちゃん？」

「うん」

「それじゃあ、ちょっと失礼します」

そう言っつて、俺は念話を使ってライを食堂まで呼び出した。

「……なあ、ソーマ。これはどういう事だ？」

「……スマン、ライ。少し話を聞いてくれ」

俺は席から立ちあがって、なのはさん達からは話声が聞こえないような場所でライに今の状況を説明する。

「実はな……あの時から、今日メールが届いたんだ」

「なあ！！ あのやつてまさか！？」

それから、俺はライに部隊長室にメールが届いてからの事を説明する。

そうして、話終わると……

「……わかった。つまり、二人で訓練校時代の昔話をしると言う事だな？」

「ああ、あの人について話すならそれしかないだろ？」

「……まあ、確かに……なぜ、スバルとティアナは呼んでないんだ？ あいつ等とは同期じゃないか」

「あいつ等自体はあの人と関わりが少ないからな、別に居ても居なくても変わらないだろ」

「……そう言う事が」

「悪いな……頼むぞ」

「……ああ」

ライに説明し終わると、俺は元の席に座る。

ライも近くで空いていた八神部隊長の隣に座った。

「それじゃあ、あの人の事を話すなら俺とライの出会いも話さなくちゃいけませんね……だよな？ ライ、なまくら」

「ああ」

そうですね、順番的にはそうなります

「じゃあ……え〜っと、俺とライが初めて会ったのは訓練校に入ってから一週間程度経った時でしたね……」

俺は、少しずつ訓練校時代の事を思い出しながら話し始めた。

〈訓練校時代〉

よ
ソーマ、朝ですよ。早く起きないと訓練に遅刻してしまいます

「……ん、ああ」

……ね、眠い

訓練校に入って約一週間。

俺はいつも通りなまくらの声で目が覚める。

ソーマ、大丈夫ですか。辛そうですけど？

「……ああ、まだこの規則正しいって言う生活に慣れてないだけだ」

そうですか。あまり、無茶はしないでくださいね

「わかってるよ」

なまくらと話しながら眠い頭を必死に動かして準備に取り掛かる。

「……なまくら、今日の訓練の予定は？」

確か今日は、射撃魔法の訓練です

「……マジかよ、訓練出る意味ないじゃん」

ですが、ソーマ。出席だけでもしておかないと単位が出ませんよ？

「そうだけどよ……」

ハッキリ言ってる気が出ない。

俺は魔法に関して射撃系や砲撃系の素質が全くないのだ。

と言うより、リンカーコアで発生させた魔力を体外に放出する事が全くできない。

自分の身体に作用する補助魔法なら使用する事も出来るが、それを放出するとなると、身体に纏わせる程度の量しか出す事が出来ないのだ。

これでは、折角A+ランクの魔力量があっても宝の持ち腐れである。

「……やっぱ、あまり行きたくないな」

俺は同期の奴らからの俺の評価を思い出して少し凹む。

魔法を遠距離運用、長距離発射出来ず、座学の成績も悪い、唯一出来る近接戦闘の訓練も成績は平均程度、こんな俺に付けられる評価なんて一つしかなかった……落ちこぼれだ。

どうせ、今日の訓練に出ても、いつも通り他の訓練生に弄られて、授業の教官にはいつもの様に嫌味を言われるだけなんだろうな……

……はあ、テンションが下がる。

ソーマ！ そろそろ時間が危ないので、早く行きましょう

「ああ、わかったよ」

とは言え、訓練に出ないと言う訳にもいかない。

……はあ、めんどくさい。

今だ、少し眠い頭で俺は部屋を出た。

ソーマ！！ 私を忘れてますよ！！ 置いて行かないでくださいー！！

……あつ、なまぐらの奴を忘れた。

俺がそれに気づいたのは部屋を出てから結構歩いてからだった。

たく、ソーマは！　なんで、私を忘れるんですか！？

「いや、悪かったって」

部屋に戻ってなまくらを取った俺はなまくらに謝りながら訓練場まで向かっていた。

時間的には危ないけど、歩いてもまだギリギリ間に合うだろう。そう思って、歩いて向かっていると、向こうの通路から歩いてきた奴と偶然肩がぶつかってしまった。

「あつ、悪い」

俺は軽く謝って訓練場に向かう。

すると、突然肩を引っ張られる間隔が襲い。

「があー!!」

突然顔を思いつきり殴られた。

ソーマ!!

「て、てめえ。なにしゃがる!!」

俺は殴られた場所を押さえながら殴ってきた奴の方向を向く。

すると、そこには俺よりも背が高く体格のいい細目の目つきの悪い男が立っていた。

「……おまえが当たってきたんだろうが」

なんだと……！！

「それなら、謝っただろうが！ それなのにいきなり殴って来やがって！」

「……チツ！ うるせえな」

「ツ！！ なんだと！！」

ソーマ！！

なんだこいつ！？

男の態度にムカついた俺は、胸倉を掴む。

「なんだ、喧嘩か？」

「オイ、あそこに居る小さいのってあの落ちこぼれじゃないか？」

「オイオイ、それを言うんなら落ちこぼれが胸倉掴んでるのって
オンリーワルフ
一匹狼じゃねえか？」

「うわあ、マジだ。あいつ死んだな」

「ああ、オンリーワルフ一匹狼に手を出して無事で済む訳ねえ」

集まって来た野次馬達がなにか言ってるがそんなのは知らん！！

「……めんどくさいな。とつとつ、離せモヤシ」

「ああ!?!」

こいつ、今なんて言いやがった?

「……………てめえの細い腕でいつまでも掴まれてたら、目障りなんだよ」

ブチッ!!

頭の血管が切れた様な音がしたと思ったその瞬間、

「…………スカしてんじゃねえぞ!! この細目野郎が!!」

俺は男に殴られた場所と同じ所を思いっきり殴り、男を殴り飛ばした。

この時はこの男が近い未来では自分の相棒として共に肩を並べてるとは全く思ってたなかった。

けど、俺とライは確かにこうして出会ったのだった。

第1話『落ちこぼれと一匹狼』（後書き）

過去編第1話いかがでしたか

ついでに言うと、この訓練校時代の事を話してるのは本編の時系列的に言うと第40話から第41話の間位になります。

本編が遅れない様にしながらこちらの過去編も書いて行きたいです。

それと、この過去編ではいつもは入れてないタイトルを入れたんですが、不評の様ならもうつけない様になりたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9492o/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～天駆ける者～ 過去編

2010年11月16日06時04分発行